

マーシャル経済学の方法について

岩下, 伸朗

<https://doi.org/10.15017/2920777>

出版情報 : 経済論究. 78, pp.11-33, 1990-11-14. 九州大学大学院経済学会
バージョン :
権利関係 :

マーシャル経済学の方法について

岩 下 伸 朗

1. 問題の所在
2. 経済学的方法的位相——J.S. ミルの継承——
3. 「有機的成長」の方法——進化論的展開——
4. 一応のむすびにかえて

1. 問題の所在

社会学者タルコット・パーソンズは、その古典的著作『社会的行為の構造』¹⁾において、マーシャルをとりあげている。パーソンズはマーシャル経済学には「古典派経済学」からの継承と離脱との二面があるとつかまえ、特にその後者の面に注目した。つまり、マーシャルが「活動」という人間の「意識的行為」を重視している側面を高く評価し、実証主義的功利主義に基礎づけられた経済理論を超える、新たな社会理論としての「行為論」の萌芽をそこに読み取っているのであった²⁾。

藤田曉男教授は、このパーソンズのマーシャル評価をめぐり、マーシャルにおける「活動・生活の変化」と「分配」・「進歩」との関連の理論展開に関して「今日的観点」を意識しつつ再検討されている。教授はパーソンズの「活動」概念を重視することの意義を認めながらも、その実在的土台としての再生産に対する認識の欠落を批判されて、マーシャルのトータルな特徴の意味を問われる。そこから、とくにマーシャル理論における「部分集合」概念にその方法的特徴を認め、これを現実的「調整作用可能領域」概念と絡めて、現代的有効性を模索されてもいる³⁾。

いずれにせよ、これらの研究は、マーシャル経済学に示された新たな視角

と、それがもつ社会学的な特徴に注目している。さらには、現代的視角への一つの起点をそこに見出し、出している。それにしても、マーシャル経済学にこうした多様な読み込みがなされるのはなぜであろうか。この問は、なぜ、新たな方法的見地が、マーシャルにおいて生れてきたのか、また経済学との関連性をも含めて、その見地の具体的特徴と展開は、どの様なものであるか、ということと関連しているであろう。こうした点は、これまで必ずしも十分には考察されてはいないように思われる。そこで、本論では、諸研究に学びながら、この新たな方法的見地を、歴史的展開の中、とりわけ、マーシャル自身が継承と発展を意識している J.S. ミルの見地との関連を基軸として、その特徴と意味とを再検討してみたいのである。このことが、逆にこれらの諸研究の意図や意義を明確にする糸口を与えるのではなかろうか。

注

- 1) Talcott Parsons, *The Structure of Social Action: A study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, McGraw Hill ed., 1937, 稻上・厚東・溝部訳『社会的行為の構造1～5』木鐸社, 1986-1989.
- 2) パーソンズが『社会的行為の構造』で考察している「行為論」の学説的展開の系譜は、マーシャル-パレート-デュルケム-ヴェーバーである。その展開の流れについては注 3) 藤田論文参照。パーソンズ社会学の全体像については、ギー・ロシェ『タルコット・パーソンズとアメリカ社会学』（倉橋重史・藤山照英訳、晃洋書房、1989）を参照した。ここでパーソンズがいう「実証主義」とは、ロシェによれば「パーソンズが非難する実証主義はコントのいうものと何の共通性ももたない。コントは『主観性』の役割を非常に強調したのである。パーソンズが実証主義というとき、ふつう彼は大ざっぱに経験主義あるいは行動主義を考えている。」上掲書、46ページ。
- 3) 藤田曉男「マーシャル経済学にかんする T・パーソンズの研究について」『京沢大学経済学部論集』第 8 巻第 2 号, 1988.

2. 経済学的方法的位相—J.S. ミルの継承—

まず、作業の手がかりとして、マーシャルの経済学の「方法」に関するいくつかの言及に注目してみよう。彼によれば、「諸事実を収集し、それらを整理して、解釈し、さらにそれらから推論を引き出すことは、ほとんどすべての他

の科学とも同じように、経済学の仕事であり、帰納と演繹という「この二面的作業に必要とされる方法は経済学に特有なものではなく、すべての科学の共通の財産である。」¹⁾ つまり、経済学においても、「帰納は分析と演繹とに助けられて適切に分類される事実を収集し、それらを整理し、分析し、さらにそれから一般的な叙述または法則を推論する。それからしばらくの間は演繹が主役を演ずる。つまり演繹は、これらの一般化のうちのいくつかを相互に関連させ、新しい一層広範な一般化あるいは法則を試験的に作り、それからふたたび帰納にたいして、その新しい法則を試験し、『検証する』ようにこれらの事実を集め、選り分け、整理するというその仕事の主な役割をなすことを要求する。」²⁾ のである。ただ、こうした方法の遂行においては、各研究者は「異なった資質と異なった目標」とに応じて「あるものは主な関心を事実の確認に向け、あるものは科学的分析に向ける」³⁾ といった、一定の研究上の分業は行なわれうると考えられている。

マーシャルが、このように「方法」論を、改めて帰納と演繹との連関として強調しているのは、両方法をめぐり、従来から多くの諸論議が展開してきたからでもあろう。マーシャルが本格的な経済学研究に取り組んで間もない1870年代には、社会学や歴史学派の台頭が著しく、それらから多くの経済学批判がなされ、とくに、スミス『国富論』出版100年記念の会合⁴⁾ では古典派経済学の方法をめぐって議論がかわされている。しかし、マーシャルは一般的な古典派経済学批判は、亜流の学者に対してのみ妥当するもので、その多くは誤解に基づくと考えている⁵⁾。しかも、帰納と演繹とをめぐり方法論に関しても実際には J.S. ミルがすでに大きな前進をなしてもいた。マーシャルはこのミルの方法の延長線で、自らの時代を改めてとらえなおさなければならないと考えているのである。

さらに、『経済学原理』付論 C「経済学の領域と方法」にはつぎのように展開がみられる。「社会における人間行為に関する実りある研究の範囲」に関連して、コントやスペンサーは、「社会生活のすべての側面は密接に関連しており、それらのどれか一つだけの特殊な研究は実りのないものにちがいないと主張する。それゆえ彼等は、経済学者もその区別された役割を放棄して、すべて

を包含する統一された社会科学の全般的な前進に献心するよう力説する。」たしかに、社会生活は様々な側面の総体であることは、マーシャルも彼らから多くを学んでいる。しかし、科学の現状を考えると「社会における人間行為の全領域はあまりにも広くかつ多様であって、単一の知的努力によって分析し、説明することはできない」。それゆえマーシャルは、いわゆる「総合社会学」の構想は時期尚早であり、それによって「統一的な社会科学の建設が開始されたとさえ言えない。」⁶⁾としている。

マーシャルは、ミルの「社会現象は相互に作用し反作用し合う関係にあるので切り離しては正しく理解できない。しかしこのことは社会の物質的、産業的な現象がそれ自身有益な一般化を受入れないということでは決してない。ただ、これらの一般化は必ず文明の一定の形態と社会進歩の一定の段階に相対的であるにちがいない」という思考を継承し、「経済学が扱う諸力は、その合成の行なわれる方法が、ミルが述べたように化学の方法よりは力学の方法であるという事実において演繹的な取扱いに対する一つの利点をもっている」⁷⁾のであるから、むしろ逆に「社会有機体」の構造と運動とを捉える科学的足場を設置するためにも、これを活用すべきであるというのである。

ただマーシャルは、「ミルはこのことの可能な範囲を誇張し、」⁸⁾「そのために経済学において演繹的方法にたいして過度の要求をしてしまった」⁹⁾とも述べている。「ミルは『諸力の合成の原理』が経済学に適用し得るという事実のうちに経済的方法の鍵を見い出したことを喜んで」いたが、マーシャルにとっては「しかし動態的問題においては、それは正しいとはいえ全部的真理ではな」¹⁰⁾いのである。

いずれにしてもマーシャルは、ミルとともに、「社会の物質的、産業的な現象が有益な一般化を受入れ」うる点を強調し、そこに独自の経済学的位相を見い出している。ただ、「経済学は、生物学同様な外的な形態のみならず内的な性質と構成が絶えず変化しつづける問題を取り扱う」のであり、「考慮しなければならない諸力は力学のそれよりも多数であり、不明確であり、熟知されておらず、性格も多様である」¹⁰⁾から「経済学の後の段階においてよりよい類推は物理学よりも生物学から得られるべきであ」り、「経済学的推論は物理的静態

の方法と類似した方法に出発し、次第にその色合いにおいてより生物学的になるべきである¹¹⁾。変化変動してやまない「社会有機体」を科学的に把握する「基準」は、古典派やミルのように単なる力学的方法にとどまるのではなく、漸次生物学的方法に向うようなものでなければならないというのである。

「経済学」の独自性を共に認めながらも、なぜ、ミルは「力学的方法」に依拠するに留まり、マーシャルがその「生物学的方法」への展開を主張するようになったのであろうか。マーシャルがミルの継承を自認しているだけに、この点に両者の見地の継承性と相違との意味を考えていく際の鍵があるようにも思われる。そこで、ここでミルの方法的見地とその特徴を諸先学に依拠しつつ、再確認しておきたい¹²⁾。

ベンサム功利主義思想とリカードウ経済学とを父ミルからたたき込まれた J. S. ミルは、父とマコーレーとの『統治論』をめぐる「演繹対帰納」の論争をみるにつけ、またコントの経済学批判から学ぶなかで、社会科学における両方法総合の必要性、ならびにベンサム功利主義の限界性を考え始める。そこから、ミルは自然科学の方法に学びつつ、『論理学体系』¹³⁾によって、具体的演繹法を示し、そこからいわば未来展望としての「逆演繹法」を社会科学の新たな方法論として提起していた。その具体的な展開が彼の『経済学原理』であった。

ミルの『原理』は「社会哲学に対するそれらの原理の若干の応用」と副題されている。ミルの社会哲学とは、尚道徳的価値の基準を人間の「快苦」に見出すという限りでは、「功利主義」に基礎付けられていた。しかし彼は、その「快苦」自体の様々な質的差異を考え、特に、社会全体の幸福化をも自らの「快楽」とするような内容を込めた「人間性の法則」を考え、しかも、この「人間性の法則」は、それ自体はいわば目標としての「第一原理」の設定であり、それは、具体的で多元的な価値観が存在している「第二次的原理」での具体的内容を媒介として貫徹するという重層的な把握を示したのである。

こうした見地の中で、ミルにとって「経済学は、このような外的自然の諸事実と人性に関する諸原理とを組合せ」¹⁴⁾ た「第二次的法則」だと位置付けられており、「経済学」は自らの社会哲学展開のための「手段」という特徴もっているといえよう。こうして「経済学」は「物理的真理の性質を持つ」生産論

と「歴史的制度的なもので政策的に改良することができる」分配論とに法則が分割されて、その論理が組み立てられていた。ミルは、なおマルサス人口論と収穫逦減法則の現実化を強く意識し、イギリスを先頭とするような先進国では、もし生産技術の改良や後進国への資本輸出がおこなわれなければ、たちまちのうちに「定常状態」に達してしまうだろうという認識をもっていた。しかし、それまでは悲観視されてきたこの「定常状態」も、彼の社会哲学に照らして、「人間性にとって最善の状態は、誰も貧しい人がいず、誰も豊かになろうと望まず、そして抜け駆けしようとする他人の努力によって追いやられることを恐れるような理由もない」¹⁵⁾ という意味で無駄な競い合いのない十全な「人間的進歩」が展開し始める時点である、との見識を逆にうちだすことができたのである。「逆演繹法」はこうした議論展開を支え、これに具体化されて意味をもっているのである。

こうしてミルの経済学は「社会哲学的な応用」であり、二次法則の解明であった。逆に言うと、二次法則としての「経済学」は、物質的關係と人間との関連を明確にするためにこそ展開されているのであるから「力学的方法」に依拠したのであった。ミルの社会法則の重層的把握の構造が、その「経済学」を「力学的方法」ととどめているように思われるのである。では、ミルの方法的見地をマーシャルはどのように継承し、また組替えているのだろうか¹⁶⁾。

マーシャルは『原理』第1編で、経済学を次の様に定義している。「政治経済学 (Political Economy) または経済学 (Economics) は生活の日常の実務における人間の研究であり、人間の個人的ならびに社会的行為のうちで、福祉の物的な必要条件の獲得およびその使用にもっとも密接に関連した部分を考察する。」「それゆえ、経済学は一面においては、富の研究である。また他の、しかもより重要な面において、人間研究の一部である。」¹⁷⁾ このようにマーシャルは、「人間」を「生活の日常の実務」のなかでとらえ、それと「福祉の物的な必要条件の獲得およびその使用」との関連に、経済学の問題を据えている。

こうした視角を設定する前提には、彼によれば、「初期の経済学者たちは人間の性格と能率をあたかも固定した不変量と見るべきもののように論じているのに対して、現代の経済学者は、それらは人間が生活している環境の産物で

あるという事実をつねに心中に持ちつづけている」¹⁸⁾ということがあった。しかも、マーシャルは、その「人間の性格」や「能率」を形づくるのは、「他のどのような影響にもまして、毎日の仕事と、その仕事によって得られる物的な資力」¹⁹⁾であるし、あるいは「能力を仕事において発揮するやり方であり、仕事を示唆する思考や感情であり、また仕事での同僚、雇主あるいは被備者との関係」²⁰⁾等だと考える。人間主体と「環境」との相互作用にあって、その「環境」の中核は日々の経済的で実務的な諸問題なのである。それゆえ、「人間の可能性について、また人間の性格が富の生産、分配および消費の支配的な方法に影響を与え、またそれによって影響される仕方」²¹⁾に注目するのが経済学であり、これがなければ、「社会有機体」の変化・運動はとらえられなくなっている。それほど「環境」の変化はめまぐるしいし、それに応じて「人間性」も変化しているというのである。

こうした「新しい運動の最初の重要な表明が、J. S. ミルのすばらしい『経済学原理』に見られた」²²⁾とはいえ、マーシャルは、なお、「経済的動機の議論」が十分ではなかったと考えて、経済学の独自の位相に関し、その根拠をさらにつきのように説明していく。「経済学は人間を日常生活においてあるがままの人間として取り扱う」。しかし、他の社会科学とは異なり、経済学は「日常の実務的な仕事に対するもっとも安定した動機」「仕事の物質的な報酬である収入を求める願望」に独自に注目することができる。そうした動機は「一定額の貨幣によって提供されるため、それは計量され、量的に示されるという、より明確な客観的立脚点をもっているからである」²³⁾。こうして、経済学はその多面的な人間行動を一面から捉え得る「明確で精密な貨幣の尺度の存在」という具体的基準をもっているというのである。マーシャルにとって「これらの計測の研究は経済学の出発点にすぎない。しかしそれは正に出発点である。」²⁴⁾

さて、ミルの方法論に学んだマーシャルによれば、「まず第一に経済学者は観察できる事実を取り扱」かわなければならぬが、彼が事実を捉えようとする時代はミルの段階とは明らかに異なってきている。この変化する時代をとらえる作業自身は『原理』でいえば、第4編「生産要因」論（産業組織論）²⁵⁾や付論A「自由産業と自由企業の成長」を中心に示されているし、より体系的に

は『産業と交易』²⁶⁾ に集大成されてもいる。それらの諸議論にも明らかなように、マーシャルが「人間」を問題とするといっても、彼の考える「人間」が、古典派のつかんでいたような「利己心」にすべてを包み込ませた等質的で無差別な「人間」とは異なっていることは言うまでもない。マーシャルは「社会的有機体の一員としての個人を問題とし」、ここで対象とされる「動機」も「大多数の経済問題において、最良の出発点は、孤立した原子としての個人ではなく、ある特定の職業集団や産業集団の構成員としての個人に作用する動機」である。「孤立した原子としての個人」という「人間」のとらえかたでは、もはや時代の社会状況を説明することはできなくなっている。「社会の生活は個人の生活の総計以上のあるもの」²⁷⁾ であり、諸個人の総和が、社会を形作ることに違いはないが、社会は正に有機体として、個人の変化・運動に還元され得ない、別の力能をもつことが認識されているのである。²⁸⁾

「日常生活のあるがままの人間」が経済学の対象であり、そこでの動機を経済学の出発点に据えるというこうしたアプローチは、一方で、限界効用の独自の発見²⁹⁾ に基づく効用理論を展開させている。これが、動機の貨幣測定性を支え、彼の抽象的な理論構造を基礎づけてもいる。しかし、マーシャルは、ジェボンズらとは異なり、単に、「動機」を消費と結びつけた「欲望」とのみではとらえていない。マーシャルは『原理』第3編「欲望とその充足」で需要の分析をおこなうにあたって、まず、「人間の進歩の段階の上昇につれて、必要とされるものの多様性は増大するし、それとともにそれらを充足する方法の多様性も増大する。」³⁰⁾ ということを強調し、しかも、「人間の発展のもっとも初期の段階において人間の諸活動を引き起すのは人間の欲求であるが、しかし後には新たな向上の各段階は、新たな欲求が新たな諸活動を引き起すというよりもむしろ、新たな活動の発展が、新たな欲求を引き起すものとみなされなければならない。」³¹⁾ とつかまえているのである。さらにここでは、生活における衣食住の歴史的で具体的なありかたが、いかに人間の性格や活動能率に大きな影響を及ぼしてきたかが強調されてもいる。つまり人間の働きかけを重視し、それを「活動」と「欲望」との相互関係の中で問題にしようとする思考である。パーソンズがもっともその意義を強調しているマーシャルの特徴であ

る。

マーシャルが、このように、人間「活動」を重視した歴史把握を示したのも、「実際自然に対するわれわれの新たな支配力は、少し前までは物理的に不可能であった、はるかに大規模な産業組織の計画に戸を開いている」³²⁾ といった19世紀後半当時の技術の発展、生産力の向上に基づく物的対象への働きかけの増大という歴史的背景があることも見落してはならないであろう。しかし、いずれにせよ、かれは、このように人間の「活動」と「欲望」との相互規定的関係を、前者を基本動因としながらつかまえて、「人間性」の具体的展開・発展をとらえるために自らの方法を具体化していくのである。

ところで、マーシャルが、動機の貨幣測定性を経済学の出発点にする視角は、他方で、経済学の理論構成において、ミルとの大きな相違を生むことにもなっている。彼は、すでに、『産業経済学』第2版（1881年）の序文でミルを高く評価しつつも「ひとつの重要な問題に関しては、ミルとはかなり異なる道を歩むことがどうしても必要であるように思える。かれは分配の問題にむけて彼自身の諸原理を完全には適用することがなかった。……それぞれ異なった内容をふくむ価格、賃金、利潤の理論の基礎には統一的な原理がある」³³⁾ と述べていた。また『原理』では「経済学より古い定義においては、経済学を富の生産、分配、交換、および消費に関する科学であるとしていた。その後の経験の示すところでは、分配と交換の諸問題は相互に密接に関連しており、両者を分離して取り扱う試みによって得られるところがあるかどうか疑わしい。」³⁴⁾ とも言っている。ミルは、分配法則において歴史的制度的に相対的な経済の側面を重視し、そこでの「しきたりや慣習」の作用を強調したが、マーシャルにおいてはその視角は後退し、まず貨幣を媒介とする「交換」という経済関係の枠組みを基礎にして歴史的社会的実質をとらえようとする立脚点であり、彼を特徴づける一面が端的に示されていると思われる³⁵⁾。

マーシャルの「経済学は富の研究であるとともに人間の研究である」という見地には、「活動」と「欲望」との相互関係性を見据えて、資本主義社会における動機の貨幣の測定性を起点として、漸次その視野を拡大することにより、歴史的に展開する産業組織社会を捕捉しようとする方法的特徴が集約されてい

ることになる。では、この方法的見地展開の具体的特徴はどの様なものだろうか。節を改めて考察してみたい。マーシャルの経済学が、進化論的経済学である、との従来からの評価をいまいし具体的に再検討してみる作業である。

注

- 1) Alfred Marshall, *Principles of Economics*, 1st ed. 1890, 9th (variorum) ed. with annotations by C. W. Guillebaud, Vol. I (Text), Macmillan, 1961, p. 29, 永澤越郎『経済学原理』(全4分冊)岩波ブックセンター-信山社, 1985, 第〔1〕分冊39ページ。以下『原理』(*Principles*)とし、引用はこれにより、該当邦訳ページを示すが、訳文にはかならずしもしたがってはいない。
- 2) *ibid.*, p. 781, 邦訳〔1〕313ページ。
- 3) *ibid.*, p. 30, 邦訳〔1〕40ページ。
- 4) 1876年5月31日に開かれた経済学クラブ (political economy club) 主催のスミス『国富論』出版100年記念祭の晩餐会および特別討論会である。この会合については、西岡幹雄「マーシャルによる『正統派』経済学の復興」同志社大学『経済学論叢』第39巻第1号, 1987, 参照。
- 5) 「アダム・スミスと初期の経済学者たちは、会話の習慣にしたがって条件文を省くことによって外見上の単純さを手に入れた。しかしそのことは絶えず誤解を引き起こし、無益な論争という形で多くの時間の浪費と混乱を引き起こした。」*Principles*, p. 37, 邦訳〔1〕50ページ。
- 6) *Principles*, p. 770, 邦訳〔1〕293ページ。
- 7) *ibid.*, p. 771, 邦訳〔1〕294-5ページ。
- 8) *ibid.*, p. 771, 邦訳〔1〕296ページ。
- 9) 'Mechanical and Biological Analogies in Economics.' in *Memorials of Alfred Marshall*, ed. by A. C. Pigou, Macmillan, 1925, pp. 312-3, 山田雄三訳「経済学における力学的類同性と生物学的類同性」杉本栄一編『マーシャル経済学選集』日本評論社, 1940, 251ページ。
- 10) *Principles*, p. 772, 邦訳〔1〕296-7ページ。
- 11) 'Mechanical and Biological Analogies in Economics.' in *Memorials*, p. 314, 邦訳252ページ。
- 12) J.S. ミルについては以下の諸論著を参照。大道安次郎「J.S. ミルにおける経済学と社会学」堀経夫編『ミル研究』未来社, 1960。杉原四郎『イギリス経済思想史』第6章「人間の進歩の経済思想」ミネルヴァ書房, 1973, 同「経済的進歩と人間の進歩——ミルの経済動態論に関する一考察——」『経済言論I』所収, 同文館, 1973。荒牧正憲「J.S. ミルの『功利主義論』について」九州大学『経済学研究』第49巻第4・5・6合併号, 1984。四野宮三郎『現代経済分析の思想源』第3章「資本主義の漸進

- 的改革論の提起——ジョン・ステュアート・ミル——」多賀出版，1987。
- 深貝保則「J. S. ミルの市場社会観と経済人像」大森郁夫編『市場と貨幣の経済思想』所収，昭和堂，1989，同「J. S. ミルの経済と倫理——科学・経済人・功利性——」山形大学紀要（社会科学）第21巻第1号，1990。
- 13) *Collected Works of John Stuart Mill, Vol VII · VIII, A System of Logic, Ratiocinative and Inductive* (1st ed. 1843) Univ. of Toronto press, 1973.
- 14) *Collected Works of John Stuart Mill, Vol. II · III, Principles of Political Economy: with Some of Their Application to Social Philosophy* (1st ed. 1848) Univ. of Toronto Press, 1965, p 21. 末永茂喜訳『経済学原理』（全5分冊）岩波書店，1960，第(1)分冊61-2ページ。
- 15) *ibid.*, p. 754, 邦訳(4)105-6ページ。
- 16) マーシャルはマーチャント・ティラーズ・スクール時代に友人とともにミルの『論理学体系』を『『熱情的に』読みかつ議論し合った，ということが伝えられている』とのことである。早坂 忠「マーシャル経済学形成過程についての若干の覚書」東京大学教養学部社会科学科編『社会科学紀要』20・21輯，1970・71，の130ページ参照。
- 17) *Principles*, p. 1, 邦訳〔1〕2ページ。
- 18) *ibid.*, p. 764, 邦訳〔1〕281ページ。
- 19) *ibid.*, p. 1, 邦訳〔1〕2ページ。
- 20) *ibid.*, p. 2, 邦訳〔1〕2-3ページ。
- 21) *ibid.*, p. 764, 邦訳〔1〕282-3ページ。
- 22) *ibid.*, p. 764, 邦訳〔1〕283ページ。
- 23) *ibid.*, p. 14, 邦訳〔1〕19ページ。
- 24) *ibid.*, p. 17, 邦訳〔1〕23ページ。
- 25) 『原理』第4編の論理展開については，橋本昭一「土地・労働・資本と収益法則——マーシャル『原理』第4編1～7章の分析視角——」関西大学『経済論集』第40巻第1号，1990，同「マーシャルの産業組織論——『原理』第4編第8章～第13章の構成——」同第40巻第2号，1990，を参照。
- 26) Alfred Marshall, *Industry and Trade*, Macmillan, 1919, 永澤越郎訳『産業と商業』岩波ブックセンター，1987。
- 27) *Principles*, p. 25, 邦訳〔1〕34-5ページ。
- 28) この点で，方法論の次元で「ミルの考えでは，社会現象は事情が複合しているが，個々の原因から生ずるはずの結果の集計として引き出されるものが全体としての結果になる。したがって社会現象を科学的に分析するためには，まず個人レベルの一般法則を複数個たてて，諸原因の合成によって推論すればよい，というのである」（深貝「J. S. ミルの市場社会観と経済人像」235ページ。）とのミルの特徴づけはマーシャルとの対比で興味深い。
- 29) この点については橋本昭一「マーシャルと『限界革命』」関西大学『経済論集』第

27巻第1号, 1977, ならびに早坂前掲論文を参照。

- 30) *Principles*, p. 86, 邦訳〔1〕124ページ。
- 31) *ibid.*, p. 89, 邦訳〔1〕129ページ。
- 32) *ibid.*, p. 249, 邦訳〔2〕169ページ。
- 33) Marshall, Alfred and Mary Paley Marshall, *The Economics of Industry*, 2nd ed., Macmillan, 1881, 橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版会, 1985。
- 34) *Principles*, p. 83, 邦訳〔1〕120ページ。
- 35) 『原理』での「特定の種類の労働であれ, 資本であれ, その他いかなるものであれ, すべてのものの正常価値はアーチの要石のように, 一方からは需要の諸力が圧迫し, 他方からは供給の諸力が圧迫し, 対抗する両側からの相競う圧力の間の均衡状態において定まる」(*Principles*, p. 526, 邦訳〔4〕34ページ)というとならえかたである。マーシャルにおける「分配」と「交換」との共通性と特殊差異性の問題については, 井手口一夫『経済学と人間の復位』新評論, 1969, 第6章「交換と分配の理論構造」参照。

3. 「有機的成長」の方法—進化論的展開—

マーシャルは, 「産業組織」の発展に注目するなかで, つぎのように言っている。「人間の生存競争に関するマルサスの歴史的な説明が, ダーウィンに動植物界における生存競争の諸結果の研究に着手させた。ダーウィンの研究は, 生存競争によって絶えず演じられる淘汰の影響の発見となった。その時以来, 生物学はその負債を返済するにとどまっただけではない。今度は経済学者達が, 一方の社会組織とくに産業組織と, 他方の高等な動物の身体的組織との間に発見された多くの深い類似性に, 多くの恩恵を受けている」。¹⁾ 「生物学的方法」の強調は, 直接的にはこうした「生物進化論」からの影響であった。しかし, とともにマーシャルがこれをうまく援用できる社会の歴史的関係が生まれてもいたのである。

「生物進化論」から学んだ視角は, 彼の経済学において集約的には, 産業構造の転換にともない大規模化しつつある諸企業間の激しい競争戦での「組織」化の展開を問題として提起された, 「代表的企業 (representative firm)」という概念に示されている。木々それぞれの盛衰(個別企業の様々なライフサイ

クル)とそれらの絡み合い総体としての森(産業・国民経済)の成長というつかまえかたである²⁾。マーシャルは、この「代表的企業」を彼のいわゆる「部分均衡」論の中軸に据えて理論展開しているのである。

マーシャルの均衡論が、効用理論を基礎とした形式的な合理性を抽象的には枠組みとしていることに違いはないであろう。しかし、彼は、「進んだ研究の方法を準備するために、弾力性をもった紐につるされた石の、あるいは、たらいの中で互いに押しあっている多数のボールの力学的な均衡に相応する、より単純な諸力の均衡を、最初に検討したい。」³⁾とも述べているように、彼の「均衡」は、収束して落ちついてしまう運動を問題としているというよりも、絶えざる現実の変動をどうして貫く傾向を問題としているのであり、すでに進化論的展開に向うべきものとして構築されているといえるであろう。

「代表的企業」の論理にも明らかのように、マーシャルは運動の「原動力は企業家たちの競争であって、各企業家はすべての機会を試みあり得る将来の諸事象を予見し、それらの相対的な割合を正しく調整し、任意の事業から得られる収入が、その事業のために必要とされる支出を超えていかなる余剰を生み出すかを考察している。」⁴⁾と述べ、その需給均衡の基本的動因を、企業の経営的活動に求めている。『原理』第5編「需要、供給および価値の一般的关系」はこの運動自体に焦点が絞られ、周知の「一時的」「短期」「長期」といった時間区分を設定した論理展開によって、企業、産業、国民経済の相互関係総体として、その再生産の機能連関を提示していくのである⁵⁾。

ところで、マーシャルはもっとも基底的な「環境」として、気候、地形、天然資源の状態といった自然的物理的「環境」をとらえ、これらが民族性や国民性を大きく左右するとも考えている。まずこうした自然的諸制約が「特定の産業を地域化させて展開させる」要因の一つでもあり、産業組織の発展及び、その発展と一定の民族性や国民性をもった「人間性」との相互連関に大きな影響を与えるものといつかまれている。こうしたとらえかたを前提しつつ、『原理』の第5編では、進化論における「自らの諸目的のために環境を利用するのにもっとも適した有機体が生き残る傾向があるという」「最適者生存」⁶⁾の論理は、諸企業間の競争過程における「代替の原理」に認められ、産業組織の発展が推

進していく社会進化のもっとも基礎的過程を捕捉するレベルで問題とされているのである。こうして、マーシャルの時間構造を持った需給均衡論には、いわば「代表的企業」概念を通して諸企業間、諸産業間、さらには国民経済といった部分集合の展開と絡めて、経済的「環境」の客体的進化過程の論理を包摂させながら、「有機的成長 (organic growth)」を推進していく基本的動因とその運動連関を明らかにしていると思われるのである。

もっともマーシャルは、社会進化の過程をなんの障害もない調和的なものだけで考えているわけではない。「もっとも高度に発展した有機体が、生存競争においてもっとも生き残るような有機体であるという学説は、それ自身が発展の過程にある」ものであるし、「環境をもっとも巧に利用する有機体は、周囲にもっとも利益を与える有機体でもあることが、しばしば明らかになるが、また時にはそれらは有害な存在であることもある。」「逆に言えば、生存競争は高度に有益であるだろう有機体を存続させそこなうかもしれない。』⁷⁾とも述べている。しかしなおその上で、人間社会では、「生存競争は、個人がもっとも進んで周囲の人々のために自らを犠牲にし、したがって彼らの環境を集团的に利用するのにもっとも適している人間の諸種族が、結局生き残るように作用する」⁸⁾と考えていく。この見地が後述するマーシャル的な倫理観の基調を語っているようである。

さて、マーシャルが、「われわれが研究のために人間生活の経済的な側面を分離することが有益であるのは、ただ一時的で、暫定的であるにすぎない」⁹⁾と言うとき、主に『原理』の第5編までの論理展開の限界が考えられてもいるだろう。「正常な需要と供給の安定均衡の理論は、われわれの構想に明確さをあたえる助けとなることは事実である」が、経済諸力に関して「それのより遠くの、複雑な論理的帰結まで推し進めて行く時」、「われわれはここで経済的進歩という高度なテーマに入っていこうとしている。」¹⁰⁾のであり、ここからがマーシャルの本題である。

それゆえ、特にミル『原理』の動態論が重視され、自らの『原理』第6編では、賃金基金説並びに賃金鉄則を批判的に検討し、需給の相互的な連関を循環的な国民分配の運動を基軸に、「自由な人間は、機械や馬や奴隷と同じ原理

で、自らの仕事に対して養育されるのではないという事実¹¹⁾と関連させて展開し、現実的な生活の諸問題と絡らめて論理が一層具体化されていくのである¹²⁾。そこでは企業家の活動だけではなく、労働者諸階層の活動も射程に入れられ、「組織」の生産力の中での彼等の活力、能率のもつ意義が、強調されていく。藤田教授が、「生活にかんする進歩」と整理された論理展開である。

マーシャルは「今日では、習慣においてもまた着想においても急速に変化が生じつつあって、すべてのそうした（階層的な一岩下）差別を破壊しつつある」というミルの認識を評価し、「ある職業においては必要とされる熟練と能力の量を減少させ、他の職業では増大させつつある原因の急速な作用によって、ほとんど廃棄されてしまった。いろいろな職業が、4つの大きな段階に分けられるとみなすことはできない。」¹³⁾し、「ある職業から他の職業に移ることが、全く不可能であるほど特殊化されている手工上の熟練が、生産においてはその重要性を、確実にますます減少しつつある。」¹⁴⁾ととらえている。まず社会的な産業組織化活動を推進、主導していく「企業家」がいる。この「企業家」にも革新的経営活動を行なう者から既成の常道を堅持するものまで幅がみられる。また「組織」化の進展にともない企業家の諸活動は様々に分化し、それらは、多数の企業経営陣 (businessmen) に担われている。こうした経営者たちとオーバーラップしつつ、その下にその「熟練」の内容が変化している「熟練労働者」たちの各階層が位置し、さらにそれにつづいて「不熟練労働者」たちが存在している。このように、彼は現実に活動している人々を諸階級の連続的で、明確な境界は見い出せないスペクトルで考えているのである。先の進歩観からもマーシャルは、産業・企業という枠組みの中で活動しているこれらの諸階級に注目し、ここに入れない「残滓階級 (residuum)」に対しては、そこへの組み込みを主張し、これを国家の役割の一つともしている。

こうした漸次的連続的な産業諸階層把握を基礎に、マーシャルは、「組織」の生産力を十全に展開させていく先進の「企業家」的な生活態度、行動様式を人々に要求している。この思考が、「生活基準 (standard of life)」向上という内容を与えられるのである。マーシャルの「生活基準」とは「欲望に対して調整される諸活動の水準」であり、その「上昇は、知性と精力と自尊の念の増

大を意味し、支出において注意と判断の増大に導き、また食欲を満たすが、体力を強化することに役立つ飲食あるいは身体的および道徳的に不健康な生活の様式を避けるように導く¹⁵⁾ものである。

以上のようにして、はじめに示された「活動」と「欲望」との歴史的一般的把握は、理論展開がすすむにつれ、具体化され、内包されて、「生活基準」概念において政策思考化されている。

「現代の産業社会の基本的な特徴」のひとつとして、彼が「一種の独立心であり、自らの進路を自ら選ぶ習慣であり、自己信頼であり、選択と決断の慎重ではあるが機敏なことであり、また将来を予見し、遠く離れた目標に合せて自分の進路を切開いていく習慣である。」¹⁶⁾ と言うのも、産業組織が高度化する社会のなかで、それに絶えず適応し、さらにそれを先取りして行くのに必要な主体的条件をマーシャルは考え、それを備えた人間を求めているからである。マーシャルが「利己主義ではなく熟慮こそが現代の特徴¹⁷⁾」というのは、「熟慮」に基づいた「活動」と、それがもたらす「能率」が、一層の組織化展開に必要な歴史的主体的条件であり、人間性もこうした特性をもつように変らねばならないからである。人間の諸活動を左右する主体的諸条件と産業的環境との相互的な関係のマーシャル的把握なのである。

こうした展開を通して、マーシャルの経済学は、「組織」化を遂行し経済を主導するはずの企業家の視点に立ち、経営学的な特徴をもつことになったのである。企業家たちに必要とされる「独立心、活力、進取、先見、正直」といった性格を時代が必要としている。労働者諸階層もこれらを身に付けていくことを通して、それぞれの領分において、いわば「企業者」化することが、求められているのである。

このような内容をもって、マーシャルの「活動」と「欲望」との相互関連性の視座は、人間的な進歩の条件を、もっぱら経済的な進歩に埋没させ、それに必要な主体的な条件と結びつけて考えられている。ミルのように、社会哲学の視点を基軸に、進歩を各次元をもつ重層的なものとかまえようとは、かならずしもしていないのである。マーシャルが、自分の時代を「企業と産業の自由」つまり「経済的自由」として特徴づけるのもこうした進歩観に基礎付けら

れているからである。

マーシャルのいう「進歩」とは、もっぱら「生産力」の向上と結び付けられていることが、明らかである。このことは、とくに『原理』第6編での、「多くの種類の職種において生産の能率の増大が起こるならば、共通の稼得の流れないしは分配分は相当に増大する」¹⁸⁾ し、「かれら（企業家—岩下）のやむことのない独創心は、国民の指導的地位の確立に役立ち、人々の労働の実質賃金を高めることを可能にし、他方において、能率を上げる装置の供給増大を促進し、国民分配分の成長を持続させる」¹⁹⁾ と言われ、「進歩」の基準が、「国民分配分」の増大に一元化され、それに結びつけてのみ考えられていることにより端的に示されてもいる。人間の活動を支える「活力や精力」に対して、「環境」としての物的な諸条件をマーシャルが如何に重視しているかでもある。しかも「人間性の諸要素は、単一の世代の間には大幅に変更されえない」²⁰⁾ のであるから、「主体」と「環境」との相互連関を考えれば、人々の「企業者化」を推進力とする「経済的進歩」の漸次的で粘り強い進展こそが、マーシャルにとっては、将来にもわたる人間性の向上に結びつく唯一の道と映るのである。

こうした観点から、「程度の差はあれ、比較的高級なすべての産業にとって共通の財産であり、これらの才能と一般的な知識と知性を意味」し、企業者の才能とも相関する「一般的能力 (general ability)」²¹⁾ の意義が高調され、その点で「我が国の学校とくに中等段階の改善ほど物的富の急速な増大に役立つ変化はないであろう。そのような改善が広範な奨学制度と結合されて、それによって労働者階級の賢明な子息たちが、学校から学校へと順次進学することができ、時代の与える最良の理論的、实际的な教育を受けることができるようになるならば、とくにそうであろう。」²²⁾ と「教育」の在り方が強調される。具体的技術や熟練の獲得も、もはやこうした「一般的能力」に基礎づけられたものなのである。マーシャルが労働者諸階層において「本人とその父親が、熟練工として、専門職として、ないしは実業家としての仕事につくために準備することに、資本と労働を投入するように誘われる動機は、企業の物的な設備と『組織』を建設することに資本と労働を投入するように導く動機と似ている。」²³⁾ というのも正に労働者諸階層においても「企業家」的判断や行動を要請してい

ることがよく示されている。「現世代にとって、最高の義務は、若い人々に対して、彼らが持っている高級な性質を發展させ、同時に、能率の高い生産者に育つ機会を提供すること」²⁴⁾なのである。

以上みてきたように、マーシャルは、競争の中での人間主体のいっその「企業者」化を提示しながら、「経済的進歩」＝「人間的進歩」という視座から「進歩」をとらえてきたのである。「競争は公共的な善のための非利己的な仕事において精力的に行なわれる協同に比較すれば、その最善の形態でさえ相対的には害悪である。」とはいえ、社会の現状において、競争は「精力と自発性の維持に不可欠であり、そのような競争の廃止は、おそらく、社会的な福祉にとって、結局、有害であるかもしれない」²⁵⁾のである。マーシャルは、競争にも二種類あるという。市場をも壊してしまうような反社会的で「破壊的な (destructive) 競争」と、人々の「精力と自発性」を維持するような「建設的な (constructive) 競争」であり、前者は避けなければならない。

こうした競争観に、彼のいわゆる「経済騎士道 (economic chivalry)」という思考が結びついているように思われる。マーシャルはつぎのように言っている。「物質的富は必然的に、ほとんどすべての者の思想と関心の中に深くはいり込んでいるから、もし現代社会がその富を誇りとしなければ、世界はそれ自身を尊敬することができなくなる。だからこそ、現代社会の真の光栄に役立つとして、富の収集に多くの努力を払うことは、確かに有意義である。」²⁶⁾ただ、ここで「産業の進歩が主としてその人の事業に依存しているような実業家達は、富そのもののために富を求めるよりも、むしろ事業の成功の印としてそれを求める場合が多い」²⁷⁾のであって、「最も有能であり、また最も優秀な実業家は、成功がもたらす金銭より以上に、成功そのものにこそ価値があるとするのである。」²⁸⁾こうした実業家の態度をより押し広めるためにも「社会の与論を導いて、これを無形の名誉裁判所 (Court of Honour) とするように努力しなければならない。そうすれば富はそれがどれ程大きなものでも、もしも、それが狡猾な手段、捏造された報道、不正な取引、または競争相手を悪辣な手段で破滅させる事などによって得られたとすれば、なんら社会的成功へのパスポートではないであろう。その目的と方法とにおいて高尚であったそうした企

業は、たとえ大きな財産をもたらさなくても、当然うけるべき公衆の賞賛と感謝とを受けるであろう²⁹⁾ というのである。しかもこのような「事業に於ける騎士道は、やがて富の使用に於ける騎士道に転³⁰⁾じ、いわば「生活基準」の向上とも結びつくことによって社会的福祉は一層増大するはずでもある。

進化論の論理を援用しつつも、生物進化とは異なり、意識的主体の存在する社会進化の過程では、そこに進化の枠組みを保持する一定の主体に対する条件が必要だというわけであろう。自由な競争の展開から社会的産業的組織化の高度化に基づき、生産力の増大が実現されていく過渡的歴史段階にあって、それを一層展開させようとするマーシャルの思考をよく示している³¹⁾。

マーシャルは『原理』の初めの部分で「経済学者の最高の目的は、どうすれば潜在的な社会的資産がもっとも速やかに開発され、もっとも賢明に活用されるかを見出すことである³²⁾」という課題を設定していた。この課題にたいして、彼自身が、企業家の公正な態度で価格形成や利益の分配を行なうというこうした「経済騎士道」を、最終的に提起しているのも、社会の現状においては、これにより、「破壊的競争」を避け、「環境をもっとも巧に利用する有機体」が「周囲にとって有害」とはならず、社会的な進歩が達成されるための枠組みを確保する条件を要請しているからなのである。

以上みてきたマーシャル的方法的見地を少し整理し、パーソンズや藤田教授の議論を深めていくための視座を確認することで一応のむすびにかえたい。

注

- 1) *Principles*, pp. 240-1, 邦訳〔2〕157-8 ページ。
- 2) 拙論「A. マーシャルの『代表的企業』について」九州大学『経済論究』第68号, 1987, 同「マーシャル経済学と『代表的企業』」九州大学『経済学研究』第56巻第3号, 1990, を参照していただけると幸いである。
- 3) *Principles*, p. 323, 邦訳〔3〕2 ページ。
- 4) *ibid.*, p. 618, 邦訳〔4〕164 ページ。
- 5) 拙論「A. マーシャルの『準地代』について」九州大学『経済論究』第71号, 1988, でこの点を考察している。
- 6) *Principles*, p. 242, 邦訳〔2〕159 ページ。
- 7) *ibid.*, pp. 241-2, 邦訳〔2〕159 ページ。

- 8) *ibid.*, p. 243, 邦訳〔2〕161ページ。
- 9) *ibid.*, p. 85, 邦訳〔1〕122-3 ページ。
- 10) *ibid.*, p. 461, 邦訳〔3〕195-6 ページ。
- 11) *ibid.*, p. 504, 邦訳〔4〕2 ページ。
- 12) 早坂 忠「J.S. ミル『経済学原理』第四篇をめぐって」東京大学『社会科学紀要』1964, 参照。
- 13) *Principles*, p. 218, 邦訳〔2〕124ページ。
- 14) *ibid.*, p. 206, 邦訳〔2〕106ページ。
- 15) *ibid.*, p. 689, 邦訳〔4〕268ページ。
- 16) *ibid.*, p. 5, 邦訳〔1〕8 ページ。
- 17) *ibid.*, p. 6, 邦訳〔1〕9 ページ。
- 18) *ibid.*, pp. 511-2, 邦訳〔4〕13ページ。
- 19) *ibid.*, p. 700, 邦訳〔4〕283ページ。
- 20) *ibid.*, p. 721, 邦訳〔4〕315ページ。
- 21) *ibid.*, p. 207, 邦訳〔2〕107ページ。
- 22) *ibid.*, p. 212, 邦訳〔2〕115ページ。
- 23) *ibid.*, p. 619, 邦訳〔4〕164ページ。
- 24) *ibid.*, p. 720, 邦訳〔4〕314ページ。
- 25) *ibid.*, pp. 8-9, 邦訳〔1〕12ページ。
- 26) 'Social Possibilities of Economic Chivalry' in *Memorials of Alfred Marshall*, ed. by A. C. Pigou, Macmillan, 1925, pp. 329-330, 金巻賢字訳「経済騎士道の社会的可能性」杉本栄一編『マーシャル経済学選集』日本評論社, 1940, 所収。
- 27) *ibid.*, p. 331, 邦訳280ページ。
- 28) *ibid.*, pp. 331-2, 邦訳280ページ。
- 29) *ibid.*, p. 343, 邦訳301-2 ページ。
- 30) *ibid.*, p. 344, 邦訳304ページ。
- 31) こうしたマーシャルの特徴に関して、これを、イギリス自由主義の危機=人々の同質化(大衆化)に対する「個人の独創性の育成」への要請を基軸として整理する、磯川暁「マーシャルにおける経済と倫理」(橋本昭一編『近代経済学の形成と展開』昭和堂, 1989, 所収)も興味深い。
- 32) *Principles*, p. 9, 邦訳〔1〕13ページ。

4. 一応のむすびにかえて

「資本蓄積の内的関連についてよりはむしろその外的具体的な展開の諸層の解明」を問題とし「構造分析的視角の欠如ないし希薄化という安易さを残存さ

せ……機能的過程分析への傾斜¹⁾を示しているという J. S. ミル経済学の特徴は、19世紀後半に於ける重化学工業化段階への産業構造の転換という歴史的過程の中で、マールにおいて、いわば動態一元的把握が推し進められ、一層徹底化したのである。マールがミルにたいして「生物学的方法」を強調したのもこのためであった。

この方法によって、マールが、資本主義社会の一定段階でもつ具体的な生産力の構造をより深く分析することに成功していることは、確かである。しかもその構造には形を変えつつも、現在にまで繋がっている多くの側面が存在していることも否定できないであろう。

しかし、他方で、こうしたマールの徹底した展開が、ミルと異なり「経済学を社会哲学的に応用するという看板を再度取り払い、もっぱら経済学内部の理論装置によって人間のさまざまな経済的動機を扱おうとしたのがマールであった。」²⁾ という評価を生み出してもくる。ミルが経済学のなかで問題とし始めた「人間性」の視点は、社会哲学的理想に支えられ、それにむけて歴史も展開すべきであると考えられていた。社会哲学を前提とした経済学という点で、ミルの経済学の方法はなお「力学的方法」に留まらなければならなかった。これに対して、マールは、「人間的進歩」を「経済的進歩」に包摂し、相対化し、かつ一体化して展開していくから、経済を連続的に社会哲学的な領域と結びつけるためにも「生物学的方法」を必要としたといえるであろう。

パーソンズは、こうしたマールの動態的把握つまり進化論的把握の中から「環境」への人間の積極的働きかけとしての「活動」を重視し、これをより抽象的にとらえる次元で議論展開している。彼はマールが経済的側面に主体的活動倫理の側面を埋没させていく面を見抜くとともに、人間の行動が純粋に合理的な経済的動機によってのみ規定されるものではないことを強調したのである。つまりパーソンズは、その経済的合理的世界と主体的活動倫理の世界を明確に区別したうえで両者の関連性を問題としていくのである。藤田教授の指摘にあるように、パーソンズが「アメリカの『大衆消費社会』の進行中」³⁾ で理論構築をすすめていたことを考えると、彼のつかまえたには、莫大な富の増大の中での経済至上主義にたいする批判的見地が見い出されるようにも思わ

れる。パーソンズ自身「事業の停滞状態の人々に対する悪影響を示すマーシャルの一文と、J. S. ミルのかの有名な『停止状態』の中の、『停止状態』はむしろ社会生活改善となりうるという一文とを対照させ、マーシャルの中にミルの上記のような発想は生れ得ないことを示唆している。」⁴⁾のであるから、パーソンズはむしろミルの示した「社会哲学」の領域を自らの時代に相応しく独自化させ、その理論的把握を目指していたともいえるのではなからうか。

としても、見てきたように、マーシャルの「有機的成長」の方法は、主体と「環境」との具体的相互作用の視点に貫かれていた。はじめにも言及したように、この点で藤田教授は、マーシャルの「実質費用論」に見られる「再生産の基底的部分の論理」と「その実在的土台の上に展開される」「活力向上・活動」との関係を強調し、マーシャルの「進歩」を「組織に関連する進歩」と「生活に関連する進歩」とから構成されると整理され、とりわけパーソンズが、前者の論理を無視している点を批判された。そのうえで、マーシャル的企業家のもつ「調整力」の重視と労働者の企業家的な「主体的意識」の要請のいうことに注目され、さらにこの「主体の『意識的行為』と経済的諸関係の調整作用可能領域を、一つの相対的独自性をもった『活動・生活領域』として見る『部分集合』の方法」を現代の「住民主導の計画性を持った地域的生活圏」に投影されてつかまれているのだった⁵⁾。たしかにマーシャルの論理を援用すれば、こうした意義も読み取れるかもしれない。

しかし、本節のはじめに掲げた評価の意味をあらためて考えると、そうしたマーシャルの基底に流れる論理と生産力のリアルな把握とに成功している裏面で資本主義社会を絶対視し、その体制的で歴史的な把握を一貫して後退させる展開になっていることも、同じく今日的観点から忘れてはならないように思われるのである。

最後に整理の一つの例としてケインズのマーシャル評を示しておこう。「マーシャルは、彼らより前の世代の経済学者を支配していた功利主義思想からあからさまに逸脱したことは一度もない、といっておそらく間違いではないであろう。けれども、彼がすべてこういった問題をどんなに慎重に取扱ったかは——その点でかれはシジウィックよりはるかにうえにあり、ジェヴォンズと

は正反対である——注目すべきものがある。彼の著作の中には、経済学的研究をなんらかの特定の倫理的教養にむすびついている個所はまったくない、と私は思う。マーシャルにとっては、経済問題の解決は快樂說的計算の応用ではなくて、人間のより高級な——「より高級な」という言葉がなにを意味するかはひとまず別として——能力を行使させるための先行条件であった。」⁶⁾ このマーシャル評価はどうとらえるべきであろうか。

注

- 1) 荒牧正憲「ジョン・ステュアート・ミルの資本蓄積論」高木暢哉編『経済学史の方法と問題』ミネルヴァ書房, 1978, 291ページ。
- 2) 深貝前掲「J. S. ミルの市場社会観と経済人象」246ページ。
- 3) 藤田前掲論文, 2ページ。
- 4) 同上, 32ページ。
- 5) 同上, 33-4ページ。
- 6) *The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vol. X, Essays in Biography*, Macmillan, 1972, p. 170, 大野忠男訳『ケインズ全集 I 人物評伝』東洋経済新報社, 1980, 228ページ。